〔歴史随想〕

# 石田興平博士と石田文庫

山本有造

戦後「満洲」経済史研究におけるパイオニアとしての石田興平博士と、その大著『満洲における植民地経済の史的展開』（ミネルヴァ書房、一九六四年）が近年ようやく再評価される機運にあることは、博士の縁に繋がるものとして誠に喜ばしい。塚瀬進氏が『中国近代東北経済史研究』（東方書店、一九九三年）においてその先駆性に言及し、安冨歩氏がその著『「満洲国」の金融』（創文社、一九九七年）で石田モデルを積極的に援用して議論を展開し、それらを受けて、最近では大学院生の論文にも石田モデルが取り上げられるにいたっている。しかし、博士の専門が金融論にあり、本書がその主著『再生産と貨幣経済』の歴史応用編として書かれたこと、満洲経済に見られる諸現象を植民地経済的再生産という立場から体系的に解明しようとした、極めて意欲的な構想に裏付けられた著作であることについては必ずしも良く理解されていない。

石田興平（いしだ・こうへい）。旧姓高橋。一九〇五年岩手県二戸郡浄法寺村に生まれる。盛岡市立（のち県立）商業学校、次いで小樽高等商業学校に進む。一九二五年いわゆる「軍教事件」に関わり無期停学処分を受ける。一九二八年京都帝国大学経済学部に選科生となり、翌二九年編入試験により本科生となる。一九三一年学部卒業、大学院に進学。小島昌太郎教授の指導の下に証券資

本主義の研究に入る。一九三三年立命館大学商学部講師、次いで高商部教授。一九三九年建国大学助教授に任ぜられ渡満（この時大学院退学）。一九四三年彦根高等商業学校教授に転任のため内地帰還。彦根高商（経専）廃止により大阪商科大学助教授。一九四六年彦根経専の復活に伴い同教授。一九五〇年滋賀大学の設置に伴い経済学部教授（金融経済論）。一九六五年大阪大学経済学部教授に配置換え（金融論）。一九六九年定年により大阪大学を退職、京都産業大学経済学部教授。一九七九年京都産業大学を退職。一九八八年京都市北区にて逝去、享年八三歳。

博士の満洲研究が、建国大学研究院における業務の一環として、いわば外性的契機により始められたことはたしかであろう。「金融を中心とする理論的研究に心を奪われていた」博士は、そうした外部的要請に「実は理論的研究に後髪を引かれる思いで、気が進まぬまま満洲研究にのり出した」と回顧している。しかし一九三九年以降、西田哲学の研究会とともに、同僚との共同研究という形で急速に満洲経済への関心が高まったことが自筆年譜から知られる。江頭恒治、黒松巌氏等との共同論文「満洲大豆の研究」などがこの例である。また、（数奇な運命を辿って戦後になって公刊されることになる）『満洲建国十年史』のチームに入り、第三部第七章「貨幣及び金融」の章を担当され、のちの金融史研究につながる準備がこの時期に着々と進められた。

年譜一九四二年の項に「〔八月〕大連、奉天、ハルピンに調査研究のため出張した。満洲経済の研究も軌道に乗っていた」とありながら、一九四三年九月には満洲での生活を切上げ、家族ともども内地に引揚げてしまう。思うに、「子供たちが次々と病気となり、この年五回も入院するという有様」がつづいて、家族の満洲生活に自信を失ったのであろう。しかし、満洲研究は継続し、日本で完成させるつもりで収集した資料類は全て内地に持ち帰られた。

こうして『満洲における植民地経済の史的展開』は、戦後の混乱期のなかで、また滋賀大学創設に関わる校務多忙のなかで精魂こめて書き継がれた。この間、現地で収集し持ちかえった資料のほかに、彦根高商（のちの滋賀大学経済学部）、大阪商科大学（のちの大阪市立大学）、その他関係する諸機関の図書を博捜し、また東方文化研究所（のちの京都大学人文科学研究所）に足繁く通って中国経済史・中

国事情について教えを請うたという。

博士の満洲経済研究の特徴を一言でいえば、満洲国経済の実態研究から入り、漸次その歴史的根拠を遡って追求するという形で進められたこと、その際、経済構造の史的展開を再生産という理論的視点から体系的に解明しようとしたところにある。博士は、満洲経済の特色を「寡占的二重植民地経済」と呼ぶ。「上からの帝国主義的な投資植民地化は、下からの民族主義的な中国移住植民地化を促進し、また逆に後者が前者を可能ならしめるという関係を通じて、満洲経済は、移住植民地と投資植民地との相互媒介的な二重構造をもつ特殊な植民地となっていったのである。しかも、ここでは、中国、ロシア、日本という三つの植民主体による寡占、従って、相互利用ないし相互における支配の拡大のための闘争を展開し乍ら、満洲の矛盾にみちた植民地経済が展開された。」

博士の構想の前半部をなす本書は二部より構成される。第一部は、満洲経済の中国依存的な民族的移住植民地的形成並びに展開を取扱い、第二部は、ロシア帝国主義の対満進出を中心に主として北満経済の寡占的二重植民地形成を取扱う。「なお、私は本書の続編をなす別巻において、日本の対満進出を中心とする満洲経済の寡占的二重植民地的形成を取上げ、最後に満洲国という形をとった独占的に重植民地的な再編成とその展開を取扱う予定である。」

こうしてようやく一九六四年に出版にこぎつけた本書は、しかしある意味では誠に不運な書物であった。日本の社会が、学界が、そして多くの満洲縁故者が「満洲」の記憶を再び掘り起こすまでに、なお数年が早すぎた。

博士の回想によれば、当初本人の意向では、本書を主論文、『再生産と貨幣経済』を副論文として学位の申請を行うつもりであったという。ところが、恩師・小島昌太郎先生が理論的論文による学位申請を主張して譲られない。自分の満洲研究により「今まで個別的に捉えられるに過ぎなかった諸現象も植民地経済的な再生産という立場から統一的体系的に解明されることになり、いろいろな点で新しい領域も開拓出来たように思う。」また自分の満洲研究は「取扱い方も私が初めて考え出したものであり、終戦前利用できない極秘資料も多く利用し、中には今日では私だけがもっている資料をつかっており、かつ在満中実際に関係した人々にあたって間違いなき事を期しているので、この方なればいささか自信がある。」という説得も通じなかっ

たという。博士が本書に込めた自負と無念の思いが伝わってくる。残念ながら当時は、学界においても本書が特に注目されたと聞かない。それだけが原因ではないであろうが、予告された続編もついに完成されることなく終わった。

それでは「私自身研究の進行につれて必要とする資料を徹底的に追い求め、手段をつくしてこれが獲得に努力を払った」とされた資料群はどうなったか。満洲からはるばる運ばれ、本書に使われた貴重な書籍・資料類はさらに彦根から京都に運ばれ、常に博士の座右にあった。続編の執筆はいつも博士の脳裏を離れなかったのである。しかし病を得て入院され、ついに続編を断念された前後の一九七八年、たまたま植民地史を専攻する筆者が満洲に興味を持ちはじめたことを知られて、その全てをさっぱりと筆者に託されることになった。父の最も親しい友人として子供の頃から可愛がって頂いたご縁であった。私はこれを「石田文庫」と名づけて簡単な目録を作り、当時の任地であった神戸に運び、転任とともに京都に持ちかえった。

一九八〇年の春にスタンフォード大学フーバー研究所文書室から持ちかえった「張公権文書」と、この「石田文庫」がその後の私の満洲経済史研究の宝物になった。これらは私の吹聴癖のお蔭でそれなりに知られるようになり、若い経済史研究者に提供して役に立つ機会も多くなった。山本有造（編）『「満洲国」の研究』（京都大学人文科学研究所、一九九三年、増補再版　緑蔭書房、一九九五年）でも、山本有造（著）『「満洲国」経済史研究』（名古屋大学出版会、近刊）でもずいぶん役に立ってくれた。私の書物は、博士が仕残された「続編」の後半部を私なりの方法で埋める試みであった。博士が見られて、「石田文庫」を託したに足ると言ってくださるかどうか。

「石田文庫」の特徴は、中国および満洲の貨幣・金融経済史に特化した書籍・パンフレット・雑誌・文書のコレクションをなすことである。書籍について、さすが天下の孤本はないが、貨幣金融史資料が現物でまとまって見られることが何よりもありがたい。今になれば明かしても差支えなかろうが、満洲建国大学所蔵本で博士が借り出されたままになったものも何点かあり、蔵書印が珍しい。パンフレット類はあるいは書籍より貴重かもしれない。満鉄調査部が日満支インフレーション調査の一環として行った「満洲インフレーション調査」は有名で、その第一部「総括並

対策篇」はすでに幾つかの復刻もあるが、第二部「資料篇」は他所にある事を知らない。年報類では『金融情勢参考資料』の康徳年間の数年分が残っている。雑誌では『満洲経済』が創刊号から特集号も含めてほぼ揃っているのが便利である。

私の満洲研究も一段落し、「石田文庫」の行く末も気に懸かり出した。石田文庫に私が収集した資料も合体して「石田記念（満洲関係）文庫」と拡大することにし、昨年春から、まず「戦前刊行物の部」の丁寧な目録作りに取り掛かっている。台湾からの留学生・厳雅美氏の協力を得てアクセスによるデータ・ベース入力をほぼ終えた。「書籍・パンフレットの部」が約五〇〇冊。「雑誌の部」が約三〇タイトル、約五〇〇冊。「年報・月報の部」が約20タイトル、約五〇冊。「文書の部」が約五〇点。「その他雑の部」が地図や紙幣スクラップなど約一〇点。ほかに博士の草稿・ノート類一式。

研究室の書架を占拠する「石田記念文庫」も近い将来には落着き先を考えなければならない時期に来ている。中国東北部（旧満洲）の大学研究機関に寄贈するというのも一案であるが、現地の資料処理の状況では時期尚早というのが大方の意見のようである。良い嫁入り先はないものであろうか。

（やまもと　ゆうぞう・京都大学人文科学研究所教授）